

氏名	狩野 愛		
ヨミガナ	カノウ アイ		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博音第311号		
学位授与年月日	平成30年9月30日		
学位論文等題目	〈論文〉 「戦術的メディア」から見たアート・アクティヴィズムークリティカル・アート・アンサンブルとA3BCの実践活動を中心にー		
論文等審査委員			
（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 毛利 嘉孝
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科） 熊倉 純子
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科） 丸井 淳史
（副査）	東京藝術大学	招聘教授	長島 確
（副査）			福住 廉

（論文内容の要旨）

本研究は、1990年代に芸術と社会運動を融合する「アート・アクティヴィズム」と呼ばれるアートの領域の一部に目されている「戦術的（タクティカル）メディア」の実践と概念に焦点を当て、その社会批判性と意義を明らかにし、芸術と政治と参加を融合した文化的実践と理論の枠組みを提示することを目標としている。本研究は、戦術的メディアが、1990年代後半にインターネット黎明期から、ソーシャルメディアが日常生活に浸透した2010年代までに、いかなる政治的視点を持って、メディアを駆使する批判的芸術の実践、つまりアート・アクティヴィズムが可能なのかという問いを立てた。

とくにこの論文では、戦術的メディアの代表的な実践者として知られているクリティカル・アート・アンサンブル（Critical Art Ensemble=CAE、1986-）のアクティヴィズムの思想や具体的な形式と社会的介入の手法を詳細に分析しながら、事例検討と理論的考察を行った。さらに、日本の戦術的メディアと捉えうる事例としてA3BC（Anti-War, Anti-Nuclear and Arts of Block-print Collective=反戦・反核・アート木版画コレクティブ）に焦点を当てた。本論文は、国と時代が異なる二つの戦術的メディアの事例を比較し考察し、冷戦後のグローバル化した社会において、いかに政治的なイデオロギーを越えて、政治的課題にアートを用いた手法でアプローチできるか、またメディア・アクティヴィストやアート・アクティヴィストに共通する美学や倫理観を浮き彫りにした。

本論文の構成を以下に示す。

序章では、戦術的メディア、アート・アクティヴィズムの先行研究を整理し、本論文の問いと構成を示した。

第1章では、本論文の1990年代から2010年代の欧米圏と日本の政治とメディア環境が変化する状況を追いながら、戦術的メディア、アート・アクティヴィズム、ソーシャリー・エンゲイジド・アートの関係性を明らかにした。

第2章では、ボリス・グロイスのアート・アクティヴィズム論に応答して、ブライアン・ホームズとCAEのアート・アクティヴィズムの理論が、モダニズムのアート規範を揺るがす視座を持つことを明らかにした。

第3章は、CAEの戦術的メディアの概要を説明し、そのコンセプトに通底する思想をブライアン・ホームズの論考を手掛かりに考察した。フーコー(Michel Foucault)の生政治、ドゥルーズ&ガタリ(Gilles Deleuze & Félix Guattari)の哲学がCAEにいかなる影響を与えているか確認した。また、戦術的メディアが、メディア・アート・アクティヴィズム境界のコミュニティで相互参照しながら発展している傾向について指摘した。

第4章は、CAEの戦術的メディアの概念の拡張性について論じた。CAEの戦術的メディアの実践面での特徴を考察し、以下3点を明らかにした。1. CAEのアート・アクティヴィズムの対象が可視化された権威と権力から、不可視化された分子レベルの権威と権力へと関心が変遷していったことを明らかにした。2. CAEが資本主義のシステムそのものに着目しながら、プロジェクトやテーマごとに戦術だけではなく戦略的なプランを立てて、参加型アクティヴィズムの戦術を組み込む実践を具体的に考察した。3. インターネットと遺伝子工学の幕開けの時代に、バイオアート、バイオバンクの文化にも注目し、戦術的メディアの位置付けを試みたが、それぞれ微妙な文化間の価値観の違いを明らかにするにとどまった。

第5章は、反戦・反核をテーマに木版画を集団制作するA3BCの事例研究である。A3BCは、2011年に起きた東日本大震災を契機に、木版画をメディアに社会運動の現場と美術空間を横断し活動してきた。この事例からは、2010年代の世界中でデモや占拠が隆盛してからのオルタナティブな文化的実践であり、身体と現実空間の重要性が再認識された時代における戦術的メディアのあり方を観察し分析した。A3BCのDiYカルチャーを共有したアクティヴィストのネットワーク、木版画のメディア性、アクティヴィズムの活動の社会的・政治的な意義を明らかにした。

第6章は、CAEとA3BCの比較と考察を通じて、1990年代から2018年までのメディア、アート、政治を総括して、戦術的メディアを再定義した。

結章は、ポスト・インターネット時代における戦術的メディアの意義を検討し、今日的なアート・アクティヴィズムの位置付けをして総括した。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、1990年代にメディアアートの領域で用いられた「戦術的メディア」という概念を中心に芸術と政治や社会を結びつける運動として近年注目されている「アート・アクティヴィズム」や「社会的に関与する芸術 (SEA=Socially Engaged Art)」を捉えなおすことで、デジタルメディア時代における芸術と政治の関係を検討しようというものである。具体的には、アメリカの「戦術的メディア」の代表的な「コレクティブ、クリティカル・アート・アンサンブル (CAE)」と日本の版画を用いたアート・アクティヴィズムのグループ「反戦・反核・アート木版画コレクティブ (A3BC)」を比較しながら、現在の「戦術メディア」の可能性を提案しようという野心的な試みである。

本論文の評価は大きく以下の三点にまとめられる。

第一に、本論文の功績は、これまで日本ではほとんど紹介されていない「戦術的メディア」の理論や実践とCAEの活動の全貌を、詳細な文献調査とコレクティブに対する聞き取りを含めた調査を行うことで明らかにしたことにある。特にインターネット黎明期のメディアアートの発展に重要な役割を果たしたCAEに関する夥しい文献を整理し、アーティストに直接確認しながらまとめられた活動は、これ自体重要な資料として評価できる。

第二に、日本でも最近紹介されつつあるSEAやアート・アクティヴィズムを、メディアアートを含む90年代以降のアート全体の変容の中に位置づけ、あらためてその問題と可能性を検討したことは評価すべきだろう。本論文には、今日社会と芸術の関係を考えるためのさまざまな示唆が含まれている。

第三に、単に海外の事例紹介にとどまらず、参与観察を通じて現在活発に活動しているA3BCの実践を詳細に描き出し、グローバルな文脈で検討したことはこの論文の重要な貢献である。特にA3BCの研究成果の一部は、SEAの第一人者であるグランド・ケスターが編集長を務める「FIELD」誌2008年Winter号に英語論文としてすでに掲載され、国内学でも高く評価されている。

論文の中では、新しい概念や理論が多いこともあり、厳密な定義がされないままに議論が進められているために、いささか論点が曖昧に感じられることもあるが、口述試問では、この問題に対しても十二分に納得のいく回答が得られた。

以上をもって、本論文を博士号を授与するに相応しい論文として評価したい。